Ⅶ　発掘の成果

1　大木前遺跡出土の古墳時代の鏡について

はじめに

今回の大木前遺跡の調査によって、丘陵斜面裾に営まれた奈良・平安期の竪穴住居跡が26軒検出され、丘陵部に展開する小規模集落の様相が明らかにされた。また、そのうちの3軒から小鍛冶炉が検出されているほか、焼土塊や炭化物を大量に伴う土壙が数多く発見され、鍛冶工房的な性格をもった集落の側面を垣間見ることができる。

このうち第5号住居跡は、出土した土器の様相から9世紀後半に位置づけられているにもかかわらず、竈脇から古墳時代前期に製作されたと考えられる鏡の小片が発見された。鏡の製作年代と住居跡の年代に大きな隔たりが認められることから、その出土意義をめぐり大きな注目を集めている。ここでは大木前遺跡から出土した鏡片について、内区主文様を中心とする検討から原鏡を同定し、類似鏡との比較からその製作年代について検討をおこなうこととする。

(1)　鏡片の出土状況

第5号住居跡は北壁に竈をもつ長軸6.5m、短軸2.5mほどの長方形平面の通有の竪穴住居跡で、遺構の上での特異な点は認め難い。鏡片は竈に向かって左手約1mの壁面付近の床面からやや浮いた状況で出土しており、特別な埋納坑などは確認されておらず、廃棄に近い状況であった。しかし、この住居跡は小鍛冶炉を床面に設けた鍛冶工房と考えられ、また住居廃絶後にも小鍛冶に関連する土壙群が多数掘削され、作業場的な空間として利用されていたようである。中でも第19号土壙からは石帯の巡方などが出土しており、集落内部における本住居跡の特異性を際立たせている。

(2)　鏡片の観察とその特徴

鏡片は鈕とその周囲部分の破片で、神像と侍仙、獣像がそれぞれ一つずつ残されている。外区を欠失しているため、銘帯及び外区文様の構成については不明である。銅質は精良で鋳上がりも良く、文様の表出は比較的鮮明で、鏡面は青銅色、鏡背面は赤銅色を呈している。注目される点として、周縁部が故意に細かく打ち割られ、さらに破断面の一部には研磨痕が観察されることから、この鏡が鋳造されてから遺棄されるまでの間の保有状況のあり方を示唆している。

次に、事実報告の繰り返しになるが、内区の各部位について簡単に説明しながら鏡の特徴を概述する。

鈕はやや腰高の半球形で、やや形の崩れた長方形の鈕孔が穿たれている。福永伸哉氏の研究によれば、長方形鈕孔は三角縁神獣鏡に特徴的にみられ、古墳時代の仿製鏡の中では神獣鏡や獣形鏡などに比較的多く認められるとしている(福永1991)、(註1)。また、鈕孔底部が鈕の基部とほぼ同じ位置にあることから、舶載鏡ではなく仿製鏡である蓋然性が高いことが知られる(秦1994)。乳は三角錐形の円座乳を2つだけ残しているが、本来の配置は4乳によって内区を4区画していたようである。

これらの点から大木前鏡は、円座鈕の周りに円圏を1条めぐらし、内区を円座の4乳によって区切り、その間に神像と侍仙、獣像を交互に配置した二神二獣が鋳出されていた蓋然性が高いことが判明した。

神像は、両側に雲気の張り出した神座に座した坐像表現を表わしたもので、特徴的な三日月形の隆帯によって衣の襞や膝の上に拱手する手を表現している。また両肩からは外向きの弧線によって翼が表現されているなど、神像表現としては原鏡を忠実に模倣している様子が窺える半面、顔は丸い頭部に点状の眼球と鼻梁線を表現しただけで口の表現を欠き、萎縮した表現となっているのが大きな特徴である。さらに舶載斜縁二神二獣鏡では神像の頭部に冠を表現し、双巻冠を戴く

西王母と三山冠を戴く東王父を表現しているのに対して、大木前鏡では冠の表現がみられず、その別が判然としなくなっている点も挙げられる。

侍仙は立像か、あるいは横向きの膝をついた人物を表現したものと考えられるが、簡略化した表現のためその決め手を欠いている。仮に立像を表現したものだとすれば、西王母に伴う侍仙（玉女）である。

首を横に傾げ、短い弧線によってスカート状の衣を表わし、腕を上に挙げた姿態を流麗に表現している。顔は丸い頭部に点状の眼球と丸く大きな鼻を表現しただけの萎縮した表現で、頭上には3条の弧線が線彫されている。

獣像は右向きの走獣を半肉彫したもので、舶載斜縁二神二獣鏡の多くが、正面形と側面形の獣像を左向きに配している場合が多いのに対して、逆向きに配されており、仿製鏡としての根拠のひとつに数えられる。

頭部は鳥頭表現に近い側面形で表現され、楕円形の頭部に点状の眼球と短線で嘴と髯を表現する。頭部の後方には長くのびた角があることから「龍」を表現したものと考えられる。頸部は鳥首状に大きく後方に反り返り、2節1単位の有節表現をもち、単線で鬣が表現されており、獣形鏡類の鳥頭表現をもつ一群のものとの強い結びつきが想定される（赤塚1998）。

獣像の肩部には半球に三巴が浮彫式に表現され、羽翼が線彫されている。このような肩部の渦文表現は管見では、大分県免ヶ平古墳（斜縁二神二獣鏡）、大阪府安満宮山古墳（4号鏡：斜縁「吾作」二神二獣鏡）、愛知県東之宮古墳（四獣形鏡）、静岡県松林山古墳（四獣形鏡）などにみられる。舶載斜縁二神二獣鏡を原鏡とし、仿製鏡の中でも神獣鏡や獣形鏡の一群に認められる表現手法のひとつであり（田中1979）、作鏡者集団の問題を考える上で重要な手がかりとなる。

(3) 原鏡の同定と製作年代

前節で検討したように、大木前遺跡から出土した鏡片は、銅質が良く鋳上がりが比較的良好であるが、各図像本来の形態が失われていることや鈕孔底面が鈕の基部と同じ位置にあるなどの特徴から仿製鏡と判断されるものである。そして、神像及び獣像の表現手法や配置などから舶載斜縁二神二獣鏡を原鏡として、模倣されたものと位置づけられる。

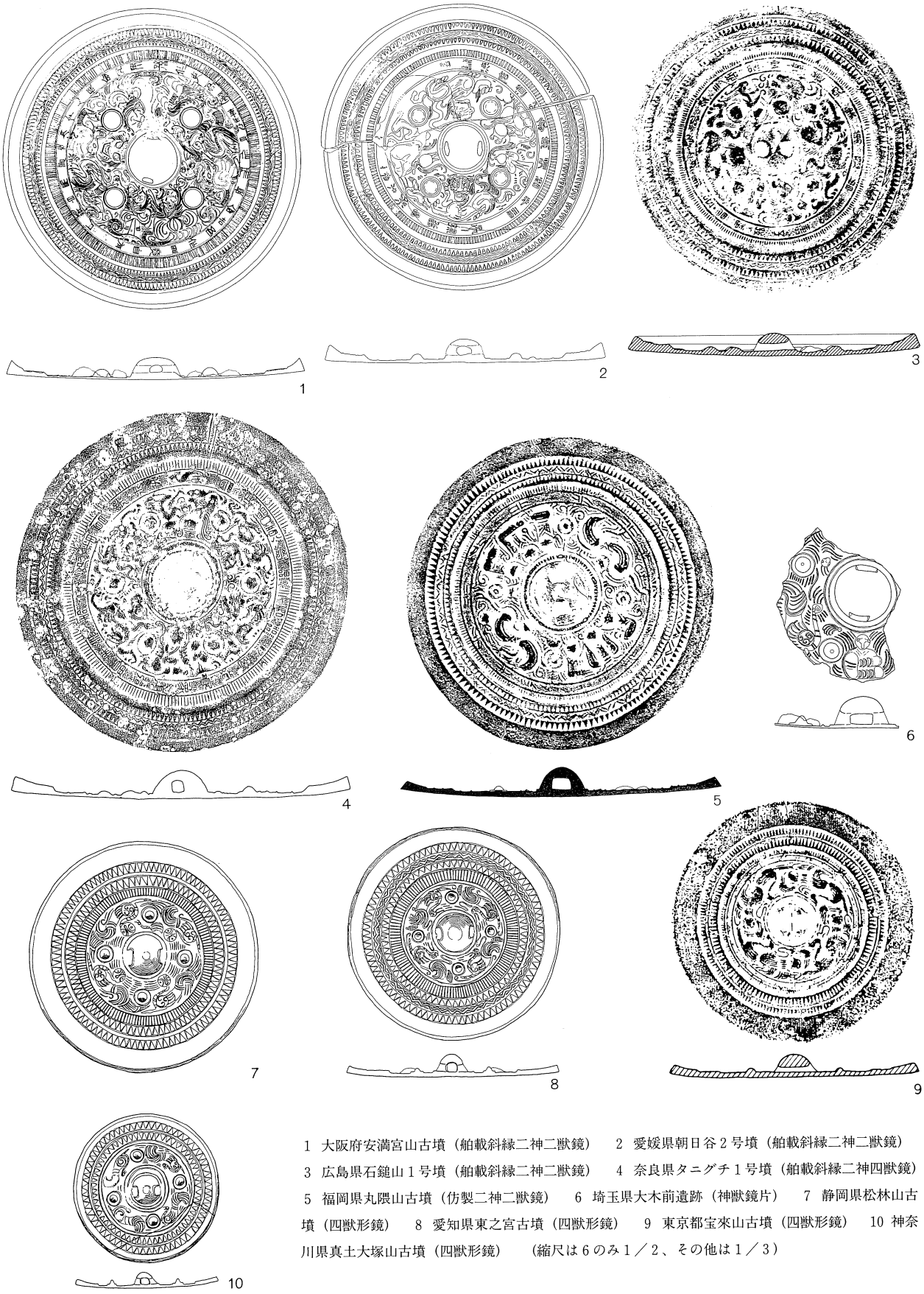
ここで大木前鏡の原鏡と想定した舶載斜縁二神二獣鏡の特徴について概述する。

舶載斜縁二神二獣鏡は、国内でこれまでに40例ほどが出土しているほか、朝鮮半島の楽浪郡域と中国から若干例が発見されている。岡村秀典氏による漢鏡7期に位置づけられ、その製作年代は2世紀後半から3世紀前半に比定されている（岡村1999）。大阪府安満宮山古墳や奈良県桜井茶臼山古墳などのように前期古墳の中でも古い段階のものから出土している例も知られるが、その多くは前期中葉以降のやや新しい段階の小規模墳から出土している。その分布は、西は福岡県から東は山梨県までひろがり、分布の密度は滋賀県・三重県より西に偏り、倣製三角縁神獣鏡に似た分布状況を示している。東日本では長野県兼清塚古墳、山梨県小平沢古墳から舶載斜縁二神二獣鏡が出土しているにすぎない。

斜縁二神二獣鏡は、神人龍虎画像鏡から派生した鏡式と考えられており、基本的には内区は4乳で分割した区画に侍仙を伴う二神と二獣を配置し、その外側には銘帯・櫛歯文帯、外区は鋸歯文と複波文に外周突線を配し、縁は斜縁という構成をとっている（森田1998）。縁は三角縁に近いものもあり、三角縁神獣鏡との親縁関係が指摘されているが、三角縁神獣鏡よりも小型で、鏡径が16～12cmを測り、銘文は「吾作明竟」で始まる「幽錬三商」式のものが多く、三角縁神獣鏡とは異なっている（樋口1979）。

このような特徴をもつ舶載斜縁二神二獣鏡に対して、仿製の二神二獣鏡は原鏡から大きく変容したものが多く、滋賀県安土瓢箪山古墳、奈良県佐紀丸塚古墳、福岡県丸隈山古墳出土の仿製斜縁二神二獣鏡が原鏡を忠実に模倣したものとして最古段階に位置づけられている（田中1979）。それらの製作年代については、安土瓢箪山古墳の中央石室から方形板革綴短甲、腕輪形石製

第１図　大木前鏡と関連鏡



1　大阪府安満宮山古墳（舶載斜縁二神二獣鏡）　2　愛媛県朝日谷２号墳（舶載斜縁二神二獣鏡）　3　広島県石鎚山１号墳（舶載斜縁二神二獣鏡）　4　奈良県タニグチ１号墳（舶載斜縁二神四獣鏡）　5　福岡県丸隈山古墳（仿製二神二獣鏡）　6　埼玉県大木前遺跡（神獣鏡片）　7　静岡県松林山古墳（四獣形鏡）　8　愛知県東之宮古墳（四獣形鏡）　9　東京都宝來山古墳（四獣形鏡）　10　神奈川県真土大塚山古墳（四獣形鏡）　（縮尺は６のみ１／２、その他は１／３）

品、筒形銅器、柳葉式銅鏃などが伴出していることから4世紀中葉を遡ることは確実である。話を大木前鏡にもどせば、獣像の表現が鳥頭表現へと大きく変容しながらも、角や鬣などの表現がみられ、龍としての意識が残っていることや図像配置などから仿製鏡としては古い段階に位置づけられ、4世紀中葉頃の製作年代を想定しておきたい。

関東地方の前期古墳から出土した仿製神獣鏡には、画文帯神獣鏡を原鏡とする群馬県三本木古墳の仿製神獣鏡や栃木県山王大桝塚古墳の仿製四神鏡（変形神獣鏡）などが知られるだけで類例が少なく、福永伸哉氏が提唱する「新式鏡群」に該当する大木前鏡は、古墳時代前期から中期にかけての政治的変動を反映した鏡として重要な位置を占めている（註2）。

(4) 鏡片の意味するもの

最後に、平安時代の住居跡から出土した古墳時代の鏡の性格について考えてみたい。

弥生時代後期から古墳時代前期を中心に鏡の鋳造時期とあまり時期を隔てない時代の遺構から出土する場合は、関東地方でも東京都・神奈川県・千葉県など南関東を中心に類例が知られている。

埼玉県内では弥生時代後期の大宮市三崎台遺跡第52号住居跡から出土した小型仿製鏡が最も古く位置づけられる(笹森1996)。続く古墳時代では、桶川市八幡耕地遺跡第4次調査で古墳時代後期の第8号住居跡から珠文鏡の破片が出土した例が知られているにすぎない（今井1989)。

一方、大木前遺跡と同じく奈良・平安時代における鏡の住居跡からの出土例には、熊谷市一本木前遺跡第13号住居跡から瑞花鴛鴦八稜鏡が出土している（寺社下2000)。年代的には10世紀末～11世紀初頭に位置づけられ、鏡を出土した竪穴住居跡からは大量の鉄滓や炭化物に混じって砥石なども出土しており、小鍛冶に関連した住居であると指摘されている。大木前遺跡との共通性が窺われるが、出土した鏡は唐式鏡と大きく異なり、同列にその背景を論じることはできない。

このほかに住居跡以外では、浦和市明花向遺跡から小型海獣葡萄鏡の内区のみを鋳出した小型鏡が遺構に伴わずに単独で出土しているほか(剱持1984)、熊谷市北島遺跡第14地点の第1号溝から瑞花文八稜鏡が出土している(鈴木1998)。両者とも水辺祭祀に関わる鏡の使用例と想定される。

前述したように大木前遺跡から出土した鏡片は、4世紀代に倭国で製作された仿製鏡であるが、それと隔てること約500年の年代差を示す住居跡から出土しており、このような鏡の製作年代と住居の時期が大きく乖離するような事例はあまり類例がない。

管見にふれたものでは、千葉県千葉市下田遺跡で9世紀前半の第49号住居跡から珠文鏡（倉田1997）が出土しているほか、住居の詳細な時期は不明であるが千葉県成田市下方内野南遺跡第38号住居跡から五獣形鏡（川津1991）が出土しているだけである。

大木前遺跡から出土した鏡片の性格については、

① 古墳時代前期に大和政権から威信財として配布された鏡が、長期間にわたって集団内保有・伝世された。

② 鋳造・鍛冶集団などの職能集団において、鏡が貴重な器物として祭器化され、「懸仏」などの神格化された器物として再利用された。

③ 周辺における前・中期古墳の副葬鏡が何らかの事情で発掘された。

等々、いくつかの場合が想定されるが、いずれにしろ鏡が製作されてから住居跡へ遺棄されるまでの間に、どこで、どのような状況で保有され、そして最終的に住居内に遺棄されたのか、それぞれの要因を合理的に説明することは難しく、恣意的な解釈に陥ってしまう恐れがあり、にわかにその出土意義を断案することはできない。

ここでは森下章司氏によって新しい視点から問題提起された、共同体における威信財としての鏡の長期間保有・伝世の問題（森下1998）を考慮したうえで、周辺における古墳時代前期の政治的動向の中に大木前鏡を位置づけていく視座が、今後必要であろうことを指

摘しておきたい（註３）。

ちなみに、６世紀前葉に築造された朝霞市一夜塚古墳には魏晋鏡に比定される方格規矩八鳳鏡が副葬されており（車崎2000）、古墳時代においても200年を越すような年代差を示す長期間保有・伝世がなされた場合があったことが指摘されている。

おわりに

大木前遺跡から出土した鏡片について内区主文様の比較検討から、４世紀中葉頃に倭国内で舶載斜縁二神二獣鏡を原鏡として、忠実に模倣された仿製二神二獣鏡の内区部分の鏡片であることを指摘した。外区文様などを欠いているため詳細な編年的位置づけは難しいが、仿製鏡の初期の作品に位置づけられ、獣像表現にみられる肩部の渦文表現や鳥頭・鳥首表現など、獣形鏡類の展開に大きな影響を与えたものと想定される。

しかしながら、大木前鏡が大きな年代差をもつ住居跡から何故出土したのか、その要因を説明することは至難であり、今後に残された課題も大きい。周辺における前期古墳の動向などとの関連を含め、さらに検討を重ねていきたいと考えている。

註

(1) 福永伸哉氏は、古墳時代の仿製鏡のなかには、大きく分けると三角縁神獣鏡および一部の神獣鏡、獣形鏡などの長方形鈕孔を持つグループと、内行花文鏡、方格規矩鏡、鼉龍鏡などの半円形鈕孔を持つグループが併存していたと想定している（福永1991）。

(2) 福永伸哉氏は、斜縁神獣鏡や対置式神獣鏡の倣製鏡の製作が中心系列鏡群や倣製三角縁神獣鏡の製作より一段階遅れることを指摘し、その背後に神獣鏡製作に関する管理の存在と政治勢力の変動を読み取ろうとする（福永1999）。

(3) 大木前遺跡周辺の北比企丘陵内部には、江南町塩古墳群や滑川町月輪古墳群などに前・中期古墳が所在している。

引用・参考文献

赤塚二郎　1998　「獣形文鏡の研究」『考古学フォーラム』10　考古学フォーラム

今井正文　1989　『昭和63年度　桶川市遺跡群発掘調査報告書』桶川市教育委員会

岡村秀典　1999　『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館

川津和久　1991　「下方内野南遺跡」『平成２年度　千葉県遺跡調査研究発表会　発表要旨』千葉県文化財法人連絡協議会他

倉田義広　1997　「下田遺跡」『平成８年度　千葉県遺跡調査研究発表会　発表要旨』千葉県文化財法人連絡協議会他

車崎正彦　2000　「古墳祭祀と祖霊観念」『考古学研究』第47巻第２号　考古学研究会

剱持和夫　1984　『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集

笹森紀己子　1996　『三崎台遺跡－第３次調査－』大宮市遺跡調査会報告第56集　大宮市遺跡調査会

寺社下　博　2000　『平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　一本木前遺跡』熊谷市教育委員会

杉崎茂樹　1999　「大木前遺跡出土の鏡片」『東北・関東前方後円墳研究会連絡誌』第７号

鈴木孝之　1998　『北島遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集

田中　琢　1979　『古鏡』日本の原始美術　8　講談社

田中　琢　1981　『古鏡』日本の美術 No.178　至文堂

秦　憲二　1994　「鈕孔製作技術から見た三角縁神獣鏡」『先史学・考古学論究』　龍田考古会

樋口隆康　1979　『古鏡』新潮社

福永伸哉　1991　「三角縁神獣鏡の系譜と性格」『考古学研究』第38巻第１号　考古学研究会

福永伸哉　1999　「古墳時代前期における神獣鏡製作の管理」『国家形成期の考古学』

森下章司　1991　「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第６号　史学研究会

森下章司　1998　「鏡の伝世」『史林』第81巻第４号　史学研究会

森田克行　1998　「青龍三年鏡とその伴侶」『古代』第105号　早稲田大学考古学会